

報 告

小学生の子どもを持つ母親のジェネリック医薬品使用状況とその関連要因

The use of generic drugs and associated factors with mothers of elementary school children

尾関佳代子

Kayoko OZEKI

杏林堂薬局 調剤事業部 調剤学術医薬品情報室

Kyorindo Pharmacy Prescription Dispensing Department Information Division

抄 録

浜松市に在住する小学生の子どもを育てている母親を対象として、ジェネリック医薬品使用状況とその関連要因に関する自記式質問紙を配布し、調査を行った。分析の結果、母親の子育て不安とジェネリック医薬品に関係した項目との統計学的に有意な関連はみられなかった。しかし、分析調査結果から、ジェネリック医薬品を知っている人、ジェネリック医薬品に対する興味が高い人・情報をほしいと思っている人は、母親もしくは子どものジェネリック医薬品の服用経験がある人、またジェネリック医薬品変更依頼経験がある人に多いという有意な関連が統計学的に明らかとなった。

これらのことから、今後の薬剤師の役割として、患者のジェネリック医薬品に対するリテラシーを高める情報を提供する機会を作っていくことの大切さが示唆された。

Abstract

A self-administered questionnaire survey was conducted regarding the use of generic drugs and associated factors with mothers of elementary school children who live in Hamamatsu City. The results of analysis showed no significance difference between mothers' anxiety over child rearing and items concerning generic drugs. However, the results also showed that most mothers who know about generic drugs, and those who are interested in or wish to have generic drug information, had experience of using these drugs themselves or giving them to their children, and had experience of asking their physicians to prescribe generic drugs.

These results suggest the importance of the pharmacists' role in which they provide an opportunity to promote patients' health literacy in choosing generic drugs.

キーワード: 母親、子育て不安、ジェネリック医薬品、認識と経験、薬剤師の役割

Keywords: mother, anxiety over child raising, generic drugs, recognition and experience, role of pharmacists

目 的

現代は子育ての難しい時代だと言われている。育児不安という現象が、社会問題として1970年代に注目され始め¹⁾、核家族化、孤立化が進み、子育てに不安をもっている母親も多い。ましてや、子どもが病気になったときの不安はとて大きいものだと考えられる^{2) 3)}。特に、小学生に入ると勉学が始まり、通学が一人になったり、学校で過ごす時間帯が長くなったりす

るなど、新たな不安材料が出てくることになる。また、地域によっては、小学校就学時前までは医療費、薬剤費が助成されるが、小学生になると、とたんに外来医療費、薬剤費がかかってくる場合もあり、子育てしている母親は不安とともに医療コスト意識もかなり高くなっているものと考えられる。そのような環境の中で、母親がジェネリック医薬品についてどのような選択をするかは、今後の薬剤師の服薬指導においても大きな

示唆を与えてくれるであろうと思われる。また、子育てに対する不安の高低によってもジェネリック医薬品に対する考え方が異なる可能性もある。しかし、ジェネリック医薬品に関する先行研究⁴⁷⁾は、多数あるが小学生の子育てをしている母親といった特定の集団にスポットを当てた研究は見受けられない。

そこで本研究では、浜松市に在住する小学生の子どもを育てている母親を対象として、ジェネリック医薬品の使用状況とその関連要因を明確にすることを研究目的とした。

方法

1. 調査方法

2008年12月から2009年3月までの期間、浜松市に在住する小学生の子どもを持つ母親230名に、自記式質問紙を配り、記載を依頼、そのうち187部が回収された(有効回収率81.3%)。浜松市は就学時前までは医療費助成がある(2010年3月現在)。

2. 分析方法

実態調査として各調査項目の単純集計と平均値算出を行った。またジェネリック医薬品に対する認識を目的変数として、カイ二乗検定、t検定、一元配置分散分析、平均値の比較を行った。ジェネリック医薬品への興味度(全く興味がない=1~大いに興味がある=4)、薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求度(全く聞きたくない=1~大いに聞きたい=4)は再コーディングした。分析ソフトはSPSS11.0Jを用いた。

結果

1. 分析対象者の属性・特性

年齢は20代~50代までで、40代が51.9%ともっとも多かった。子どもの人数は2人が61.0%と一番多く、小学生の子どもの人数は1人~3人で、1人が64.7%であった。また、子どもに慢性疾患がある人は17.6%であった。

2. 小学生の子どもの子育てや病気に関連した意識・実態

小学生の子どもの子育てに対する不安や悩みは、「すごくある」13.4%、「少しある」72.7%で、8割以上の人が何らかの不安や悩みを抱えていた。不安や悩みの内容を8項目から複数選択してもらったところ、平均で1.43項目が選択されていた。具体的には、「子育て

で出費がかさむ」が40.1%で一番の不安や悩みの要因となっていた。次いで、「仕事が十分にできない」20.3%、「自分の自由な時間が持てない」19.3%、「子育てによる身体の疲れが大きい」17.1%と続いていた。子どもが病気になった際に相談できる人を、18の選択肢から複数回答してもらったところ、平均相談先数は3.03であった。「夫」が56.7%と一番多く、次に「近隣や地域の友人」47.6%、「母親」47.1%、「医師」32.6%と続くが、「薬剤師」は2.7%にとどまった。

周りとの相談による受診の見合わせについては、「ときどきある」が51.9%、「しょっちゅうある」が7.0%と、両方で6割を占め、「一度もない」は38.0%であった。

学校で薬剤師に相談できる機会希望についてたずねたところ、「あるとまあよいと思う」55.1%、「あると大変良いと思う」17.6%であった。

3. ジェネリック医薬品に関する認識

ジェネリック医薬品については約7割の人が知っていたが、「聞いたことはあるがよくわからない」人も2割強いた。ジェネリック医薬品への興味度では、「大いに興味がある」「まあ興味がある」を合わせると、7割以上が興味を持ち、薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求度についてみても、「大いに聞きたい」「まあ聞きたい」を合わせると、7割を超えていた。また、子どもの短期処方ジェネリック医薬品への変更希望は、5割を超えていた。

4. ジェネリック医薬品をめぐる経験

母親自身がジェネリック医薬品の服用経験のある人は21.9%、また、自分の薬をジェネリック医薬品へ変更依頼をした経験のある人は9.1%、子どもの薬の変更依頼経験のある人は5.3%であった。小学生向けの市販薬を購入する際に薬剤師に相談するかどうかは、「いつも相談する」「よく相談する」をあわせて32.1%であった。なお、処方箋様式の変更を知っていた人は28.3%であった。

5. ジェネリック医薬品の認知有無と各変数とのクロス集計

ジェネリック医薬品について「知らない・よくわからない」人よりも「知っている」人のほうが、ジェネリック医薬品への興味度が統計学的にみて有意に高く($p < 0.001$)、薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求度も統計学的にみて有意に高かった($p < 0.001$)。

表1. ジェネリック医薬品の認知有無と各変数とのクロス集計 (人数,%)

変数	知っている	知らない・よくわからない	
年齢			
20代	0 (0.0)	1 (1.8)	
30代	52 (40.9)	30 (52.6)	
40代	71 (55.9)	25 (43.9)	χ^2 値=6.449
50代	4 (3.1)	1 (1.8)	ns
小学生の子どもの子育てに対する不安や悩み			
ごくある	19 (14.7)	6 (10.7)	
少しある	96 (74.4)	39 (69.6)	χ^2 値=3.842
ほとんどない	14 (10.9)	11 (19.6)	ns
周りとの相談による受診の見合わせ			
一度もない	50 (39.4)	21 (39.6)	
ときどきある	69 (54.3)	28 (52.8)	χ^2 値=3.561
しょっちゅうある	8 (6.3)	4 (7.5)	ns
学校で薬剤師に相談できる機会希望			
あると大変良いと思う	20 (16.0)	12 (21.8)	
あるとまあ良いと思う	74 (59.2)	29 (52.7)	χ^2 値=6.745
なくていいと思う	31 (24.8)	14 (25.5)	ns
小学生向けの市販薬を購入する際の薬剤師への相談の有無			
いつも相談する	14 (11.6)	3 (5.8)	
よく相談する	35 (28.9)	8 (15.4)	
あまり相談しない	47 (38.8)	30 (57.7)	χ^2 値=11.069
全く相談しない	21 (17.4)	8 (15.4)	ns
ジェネリック医薬品への興味度			
大いに興味がある	25 (19.4)	2 (3.8)	
まあ興味がある	87 (67.4)	27 (50.9)	
あまり興味がない	12 (9.3)	20 (37.7)	χ^2 値=41.597
全く興味がない	5 (3.9)	4 (7.5)	p<0.001
薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求度			
大いに聞きたい	13 (10.3)	2 (3.7)	
まあ聞きたい	92 (73.0)	27 (50.0)	
あまり聞きたくない	15 (11.9)	22 (40.7)	χ^2 値=27.330
全く聞きたくない	6 (4.8)	3 (5.6)	p<0.001

カイ二乗検定による ns: not significant

無回答は各分析で外した。

6. ジェネリック医薬品への興味度及び薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求度と各々の平均値の比較検討

ジェネリック医薬品への興味度と有意な相関がみられたのは、「学校で薬剤師に相談できる機会希望」(p < 0.01)、「薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求

度」(p < 0.001)であった。一方、薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求度と有意な相関がみられたのは、「ジェネリック医薬品への興味度」以外では、「学校で薬剤師に相談できる機会希望」(p < 0.001)、「小学生向けの市販薬を購入する際の薬剤師への相談の有無」(p < 0.05)があった。

表 2. ジェネリック医薬品への興味度及び薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求度各々の平均値の比較検討

変数	ジェネリック医薬品への興味度 平均値		薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求度 平均値	
年代				
20代	2.00		3.00	
30代	2.85±0.64		2.78±0.59	
40代	2.88±0.77	F 値=0.585	2.76±0.71	F 値=0.735
50代	3.00±0.71	ns	3.20±0.45	ns
小学生の子どもの子育てに対する不安や悩み				p
すごくある	3.00±0.41		2.92±0.28	
少しある	2.89±0.72	F 値=0.779	2.80±0.69	F 値=1.761
ほとんどない	2.75±0.85	ns	2.57±0.79	ns
周りとの相談による受診の見合わせ				
一度もない	2.94±0.71		2.81±0.69	
ときどきある	2.82±0.70	F 値=1.575	2.73±0.66	F 値=1.490
しょっちゅうある	3.18±0.75	ns	3.09±0.54	ns
学校で薬剤師に相談できる機会希望				
あると大変良いと思う	3.20±0.61		3.06±0.57	
あるとまあ良いと思う	2.92±0.67	F 値=7.406	2.84±0.61	F 値=9.521
なくていいと思う	2.59±0.76	p<0.01	2.44±0.73	p<0.001
小学生向けの市販薬を購入する際の薬剤師への相談の有無				
いつも相談する	3.06±0.83		2.94±0.77	
よく相談する	3.07±0.51		2.95±0.49	
あまり相談しない	2.86±0.60	F 値=2.113	2.76±0.59	F 値=2.820
全く相談しない	2.64±0.99	p<0.1	2.50±0.88	p<0.05
薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求度				
大いに聞きたい	3.73±0.46		-	-
まあ聞きたい	3.07±0.41		-	-
あまり聞きたくない	2.27±0.56	F 値=70.462	-	-
全く聞きたくない	1.33±1.00	p<0.001	-	-

一元配置分散分析による ns: not significant
無回答は各分析で外した。

7. ジェネリック医薬品の認知有無の各変数とのクロス集計

ジェネリック医薬品について「知らない・よくわからない」人よりも「知っている」人で、母親のジェネリック医薬品の服用経験がより多く (p<0.001)、母親の薬

のジェネリック医薬品への変更依頼経験がよりあり (p<0.01)、子どもの短期処方でのジェネリック医薬品への変更希望がより高く (p<0.01)、子どもの薬のジェネリック医薬品への変更依頼経験があり (p<0.05)、処方箋様式の変更の認識がより強くあった (p<0.001)。

8. 各変数におけるジェネリック医薬品への興味度及び薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求度の平均値の比較

ジェネリック医薬品への興味度及び薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求度、いずれについても、母親のジェネリック医薬品服用経験が「ある」場合で「ない・わからない」場合よりも（興味度で $p < 0.01$ 、訴求度で $p < 0.05$ 、以下同順で記載）、母親の薬のジェネリック医薬品への変更依頼経験が「ある」人でそうでない人よりも（ $p < 0.05$ 、 $p < 0.05$ ）、子どもの短期処方ジェネリック医薬品への変更希望が「ある」人で「ない」人よりも（ $p < 0.001$ 、 $p < 0.001$ ）、処方箋様式の変更の認識について「知っていた」人のほうが「知らなかった」人よりも（ $p < 0.05$ 、 $p < 0.01$ ）、それぞれ有意に高くなっていった。また、有意ではないが $p < 0.1$ で、子どもの慢性疾患が「ある」人で「ない」人よりも薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求度がより高くなっていった。

考察

1. 小学生の子どもの子育てや病気に関連した意識・実態

小学生の子どもの子育てをする際には、経済面の不安に加え、時間的制約が強まることによる悩みが大きく、それらをどう支援していくのが重要な課題であると考えられる。手当の支給など、経済面についての支援に加え、学童保育等の充実も重要である。

一方、子どもが病気になったときには、医師を除くと薬剤師など病院関係者は登場せず、家族や近隣の人に相談し、「素人判断」のもと、受診を見合わせている現状があることが示された。「医療の素人」は医療分野においても lay person としての位置づけがされ、そのあり方について理論的にも模索されているところである⁴⁾。lay person なりにも、医療の主体であるという認識を持ち、情報リテラシーを高めることが重要であろう。さらには、子どもが病気になったときに相談窓口としてより機能できるような医療関係の専門家の役割も同時に期待される。

表 3. ジェネリック医薬品の認知有無の各変数とのクロス集計 (人数、%)

変数	ジェネリック医薬品を知っている	ジェネリック医薬品を知らない・よくわからない	
母親のジェネリック医薬品の服用経験			
ある	39(30.2)	2(3.6)	χ^2 値=20.960 $p < 0.001$
ない	67(51.9)	25(44.6)	
わからない	23(17.8)	29(51.8)	
母親の薬のジェネリック医薬品への変更依頼経験の有無			
ある	17(13.2)	0(0.0)	χ^2 値=8.127 $p < 0.01$
ない	112(86.8)	56(100.0)	
子どもの短期処方ジェネリック医薬品への変更希望			
変更希望あり	81(65.9)	19(38.8)	χ^2 値=10.557 $p < 0.01$
変更希望なし	42(34.1)	30(61.2)	
子どもの薬のジェネリック医薬品への変更依頼経験の有無			
ある	10(7.8)	0(0.0)	χ^2 値=4.589 $p < 0.05$
ない	119(92.2)	56(100.0)	
処方箋様式の変更の認識			
知っていた	50(38.8)	3(5.4)	χ^2 値=21.314 $p < 0.001$
知らなかった	79(61.2)	53(94.6)	
子どもの慢性疾患の有無			
ある	26(20.5)	7(13.0)	χ^2 値=1.433 ns
ない	101(79.5)	47(87.0)	

カイ二乗検定による ただしセル内 n が 5 以下の場合 Yates の補正を施した。

ns: not significant

無回答は各分析で外した。

表 4. 各変数におけるジェネリック医薬品への興味度及び薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求度の平均値の比較

変数	ジェネリック医薬品への興味度 平均値		薬剤師からのジェネリック医薬品説明訴求度 平均値	
母親のジェネリック医薬品の服用経験				
ある	3.20±0.60		3.03±0.58	
ない	2.82±0.74	F 値=6.201	2.75±0.66	F 値=4.284
わからない	2.70±0.71	p<0.01	2.63±0.69	p<0.05
母親の薬のジェネリック医薬品への変更依頼経験の有無				
ある	3.24±0.56	t 値=4.925	3.12±0.60	t 値=5.017
ない	2.84±0.72	p<0.05	2.74±0.66	p<0.05
子どもの短期処方ジェネリック医薬品への変更希望				
変更希望あり	3.17±0.53	t 値=44.435	2.99±0.54	t 値=22.619
変更希望なし	2.53±0.73	p<0.001	2.53±0.72	p<0.001
子どもの薬のジェネリック医薬品への変更依頼経験の有無				
ある	3.20±0.63	t 値=2.330	3.10±0.32	t 値=2.508
ない	2.85±0.72	ns	2.76±0.69	ns
処方箋様式の変更の認識				
知っていた	3.06±0.60	t 値=5.030	3.00±0.54	t 値=8.040
知らなかった	2.80±0.74	p<0.05	2.69±0.69	p<0.01
子どもの慢性疾患の有無				
ある	2.94±0.56	t 値=0.234	2.97±0.56	t 値=2.893
ない	2.87±0.73	ns	2.74±0.69	p<0.1

t 検定ないしは一元配置分散分析による ns: not significant
無回答は各分析で外した。

2. ジェネリック医薬品に関する認識と経験

ジェネリック医薬品については、認知度が高いことが伺えたが、よくわからない人も2割強いた。さらに、子どもの短期処方ジェネリック医薬品への変更希望は、半数強であった。

これらのことから、ジェネリック医薬品とは何かという正確な認知を高めるよう工夫する必要があると強く示唆される。同時に、子どもの医薬品処方においてジェネリック医薬品を使うことのメリットや先発品との違いについても説明の機会を設け、背景に存在していると考えられる漠然とした不安を解消できるようにする必要があるだろう。

処方箋様式が2008年から変更になりジェネリック医薬品への変更が患者希望でできるようになったが、

それについて知らない人が7割に上っていた。処方箋変更についての情報を知らせることも重要な施策と考えられる。

3. ジェネリック医薬品をどんな人が知っているのか

ジェネリック医薬品をよく知るということは、メディアやCMにより名前を耳にするだけでは「よく知る」ことには通じず、実際に服用したり、変更依頼をすることを通じて初めて「よく知る」ことになっている現状を反映している可能性がある。ジェネリック医薬品選択の機会を広げ、母親らが主体的に選べるようにするためには、実際に服用したり、変更依頼しなくてもジェネリック医薬品とはどういうものなのかを十分知っておけるような機会を創出する必要があるだろう。

4. ジェネリック医薬品への興味が高い人・情報をほしいと思っている人はどんな人か

ジェネリック医薬品の認知と同様、服用経験や変更依頼の経験を持つことが、興味を高め、情報をより欲しいと思うことに結びついていると考えられる。さらに、ジェネリック医薬品の認知と異なり、子どもに疾患があることや、処方箋様式というシステム変更への日常的なセンシビティも影響を与えている可能性があるものと思われた。

ジェネリック医薬品への興味が高い人・情報をほしいと思っている人はまた、薬剤師に相談できる機会を希望したり、薬剤師への相談をしたり、薬剤師から説明を受けたりすることを期待している状況にあった。薬剤師はこうした期待に添えるように、体制を整備しておく必要がある。

結語

小学生の子どもを持つ母親に、ジェネリック医薬品使用状況とその関連要因に関するアンケートを行い、検討した。その結果、今回は母親の子育て不安とジェネリック医薬品に関係した項目との統計学的に有意な関連はみられなかった。しかし、分析の結果、実際にジェネリック医薬品に何らかの関わりを持ったことのある人にジェネリック医薬品に対する認知、興味が高いことが明らかとなった。

これからは薬剤師が中心となって、地域社会の相談役という役割を担い、ジェネリック医薬品のみならず、子育てに関することなども含めて、情報提供に努め、患者のニーズに答えることが、医療の担い手としての存在意義を高めることとなると言えよう。

謝辞

調査に回答してくださった皆様に感謝申し上げます。また、本研究を遂行するにあたり、さまざまな助言をくださった放送大学の井上洋士教授にも厚く御礼申し上げます。

文献

- 1) 坂間伊津美、山崎喜比古ほか：育児ストレスの規定要因に関する研究, 日本公衆衛生雑誌 1999;46:250-261
- 2) 木原キヨ子：慢性疾患患児で在宅療養を要する子どもの家族支援, チャイルドヘルス 2003;6:61-65
- 3) 小林八代枝：親の接する態度が慢性疾患児の

パーソナリティに及ぼす要因分析, 小児保健研究 2006;65:265-272

- 4) 山本吉章、山谷明正、舟木弘、堀部千治：外来患者における薬剤費とジェネリック医薬品に対する意識調査, 医療 2007;60(7):459-464
- 5) 田中秀和、佐藤哲、前田昌子：ジェネリック医薬品による代替調剤に関する開業医の意識調査とその解析, 医療薬学 2002;28(3):294-300
- 6) Alex Y. Chen, MD, MSHS; Susan Wu, MD : Dispensing Pattern of Generic and Brand-Name Drug in Children, Academic Pediatric Association 2008;8(3)189-194
- 7) Patti Gasdek Manolakis : Prescription drug product substitution decision support, Journal of the American Pharmacists Association 2007;47(3)328-347
- 8) Julia Lawton: Lay experiences of health and illness past research and future agendas, Sociology of Health & Illness Silver Anniversary Issue 2003;25:23-40

